

NEWSレター

2025年度NGO活動状況調査報告



週末マーケット（露店）で
家庭菜園の野菜等の販売



2025年度のNGO活動状況調査は、2026年1月29日(木)～2月2日(月)までの5日間の旅程で、当財団職員2名をスリランカに派遣しました。

スリランカ・中部州マータレー県において支援活動を行っている「一般社団法人Think Locally Act Globally(TLAG)」は、家庭菜園の有機栽培研修を通じ女性を組織化し、協同組合設立と農作物や加工品販売による収入創出と自立を支援しています。

2025 年度 NGO 海外援助活動助成事業	
活動名	環境にやさしいオーガニック家庭菜園を通じた地方女性のエンパワメントと生計向上支援
助成実績	1,000,000 円
活動実施国・地域	スリランカ国中部州マターレー県マターレー市
団 体 概 要	
設立年月日	2015 年 3 月 (2016 年 3 月 2 日)
活動目的	1)日本の地域 (特に北陸) の地域づくり活動を効果的な国際協力につなげること。 2)日本と途上国の学び合いによる地域づくり活動を実践すること。 3)国際協力活動を日本の地方の課題解決に活かしていくこと。
主な活動	(1)スリランカ：マターレーの女性によるオーガニック家庭菜園支援事業 (2)ブータン：脳卒中後遺症患者への農業リハビリテーション導入事業 (3)日本：能登半島地震の被災地支援 (4)日本：北陸での研修実施 (実績:JICA 青年研修 3 回、石川県国際貢献プログラム 2 回受託) *研修員：東南アジア、アフリカ、中央アジア等



1. 活動の概要

スリランカ中部に位置するマータレーは、主にシンハラ（40%）、タミル（36%）、ムスリム（23%）の3民族が共に暮らす地方都市ですが、低所得層の女性の多くは家庭内労働に限られ、安定した収入を得る機会がほとんどありません。加えて、2019年のテロやコロナ禍による経済危機、物価高騰が生活を一層困難にしています。

一方で、マータレーは農業に適した土地であるものの、気候変動による集中豪雨や環境負荷の高い農法が課題となってきました。

TLAGは、意欲ある女性たちを中心に「ミヒカタ協同組合」を設立し、有機野菜の栽培や加工品の販売を通じた収入創出に取り組んでいます。ミヒカタはシンハラ語で「地球」という意味です。

現在、協同組合は設立から3年を迎え、組織力や販売力の強化が求められています。研修や商品開発支援を通じ、女性たちが主体的に活動を継続できる体制づくりを進め、環境に配慮した持続可能な地域発展を目指しています。

スリランカ・マータレーでの活動展開について

～石橋裕子代表に聞きました～

——「Think Locally Act Globally」（TLAG）という団体名に込められた意図を教えてください。

石橋さん：TLAGは北陸を拠点に活動している団体で、中央や首都圏の視点ではなく、地方や地域の視点を大切にしています。私自身は首都圏出身ですが、北陸に移住してみて、「地方だからこそできる国際協力がある」ということに気づきました。

国は違っても、例えばスリランカと日本の地方が抱える課題には共通点があります。そうした課題を、地域の視点から一緒に考え、解決を目指していく。その思いを込めて、この名前をつけました。

——マータレーで活動を始めた背景と有機栽培・協同組合に重点を置いた理由について教えてください。

石橋さん：1999年にJICA海外協力隊としてマータレーで活動した経験が原点です。地方にあるマータレーで生活する低所得層の女性の多くは、シンハラ・タミル・ムスリムの3民族共に家庭での料理・裁縫・子供の世話が主な役割であり、収入を得られる仕事がない。マータレーでは雇用機会に限られ、特に女性の就労機会はほとんどありません。低所得層では初等教育か中等教育しか修了していない女性も多く、収入に結びつく技術も持っていません。当時、女性の焼身自殺という出来事があり、女性の社会・経済的課題の深刻さを痛感しました。その後、女性主体の貯蓄活動が長く続いていることを知り、女性の力の可能性を確信しました。そこで2021年3月から85世帯を対象に、コロナ禍で生活がさらに厳しくなる中、異なる民族の女性が協力し、栄養改善と収入向上を同時に目指せる方法として、有機家庭菜園と協同組合設立に取り組みました。家庭菜園は自宅でき、地域の環境にも適していました。

——活動で最も達成感を得た点と難しかった点は何ですか。

石橋さん：約5年間活動を継続し、協同組合を政府登録まで進め、定期的な販売や地域外への販路を開拓できたことが大きな成果です。一方で、シンハラ人に偏りがちで、タミル人やムスリムの参加を広げる民族バランスの調整は課題です。

——協同組合自立に向けた長期ビジョンはどのようなものですか。

石橋さん：目標は協同組合の自立で、その鍵は販売の発展と組織強化です。常設店舗化や販路拡大を進めると同時に、育ってきたリーダーを中心に運営体制を固めていきます。将来は地域の人々自身が主体となり、連帯感を活かして組合を運営できる形を目指しています。



TLAG石橋裕子代表(右)と小島路生事務局長(左)

2. 現地の人々の声

——どんな作物を家庭菜園で作っていますか。また、有機栽培技術を学んで、作物の収穫量や質は向上しましたか。

ラジンドゥラさん：初めはヘビウリ(食用)を作りました。それからオクラとナイミリス(緑色の大きめの唐辛子・ピーマン系の野菜)を作りました。有機栽培技術を学んで収穫量が増加し品質が向上しました。体に良い作物として評価され、購入してくれる人が増えました。



家庭菜園の作物の様子

リーラさん：最初はモリンガを栽培しました。それから試行錯誤しているんなものを手掛けています。有機栽培の野菜は味がとても良いと感じています。また、化学肥料・農薬を使っていないため、食べ物に対する「怖さ」がなくなりました。このため、家族、特に子どもにも安心して食べさせられるようになりました。

クウムドさん：インゲン豆、オクラ、ナス、唐辛子、カンクン(空心菜)などです。高価なスパイス(カルダモンなど)も育てています。以前はほとんど何も作っていませんでしたが、今は多種類の野菜を収穫できるようになりました。化学肥料は使わず、自分たちで作った有機肥料(コンポスト)だけを使用しています。作物の質が向上し、安心して食べられる野菜になったように感じています。



ラジンドゥラさん



自分で作った有機由来の農薬をもつリーラさん

——有機栽培や加工品づくりを学んでから、あなたの日々の生活や家計に最も大きく変化した点は何ですか。

ラジンドゥラさん、リーラさん：店で野菜を買う必要がほとんどなくなったため支出が減り、少しずつでも自分で育てたものからお金を得られるようになりました。それで使い道を自分で決められる自分のお金ができ、銀行に貯金もできるようになりました。

クウムドさん：家計が楽になりました。また、体の健康だけでなく、心の健康がとても良くなり、朝、家庭菜園を見ると心が洗われるような気持ちになります。

——週末マーケットやイベントでの販売経験を通じて、お客様から最も反響が大きかった商品や販売の難しさを感じたのはどのような点でしたか。

ラジンドゥラさん、リーラさん、クウムドさん：お客様は「有機」「化学肥料・農薬不使用」と聞くと安心して購入します。反響が大きい商品は、生で食べられる葉物野菜、果物、有機・コンポスト栽培と分かる商品などです。しかし、生産量が限られているため売る量が足りないことがあり、加工品はまだ需要が少ない点が課題です。

——常設の加工販売施設ができることについて、どのような期待がありますか。

ラジンドゥラさん、リーラさん、クウムドさん：メインストリート沿いに加工販売施設ができ、通行人が商品を見て、自然に立ち寄れるところがよいです。自分たちの作った野菜・商品を確実に販売できる場所ができ、他の場所に持って行けなくても、加工販売施設に持ち込めば売れる安心感があります。



クウムドさん

～現地のチーフ・コーディネーターと フィールド・コーディネーターに聞きました～

——有機栽培の研修等プロジェクトが開始してから、女性たちの生活・意識の変化はありましたか。

アベラトゥナさん：開始前、多くの女性は家で過ごすことが多く、特にムスリム女性は社会的に孤立しがちで、他宗教・他民族との交流もほとんどありませんでした。開始後は女性たちが積極的に活動するようになり、貯蓄を始める人も増えました。作物を交換したり、宗教行事で食べ物を分け合ったりする中で友情や仲間意識が育ち、「仲間ができて幸せだ」という声も多く聞かれます。



現地チーフ・コーディネーターの
アベラトゥナさん



現地フィールド・コーディネーター
のラクシュミーさん

——印象的なエピソードはありましたか。

ラクシュミーさん：以前はムスリム女性が外出したり、他民族の会議に参加したりすることはほとんどありませんでした。しかし現在は、シンハラ、タミル、ムスリムの女性たちが共に会議に参加し、社会活動に関わっています。このプロジェクトは社会的・文化的な壁を越えるきっかけになったと思います。

——ミヒカタ協同組合の組織運営で工夫している点や苦勞はありますか。

アベラトゥナさん：協同組合の運営は女性たちにとって初めての経験です。TLAGが組織づくりを支援し、研修や継続的なモニタリングを行いながら、「できるだけ女性自身が運営できること」を重視しています。行政との橋渡しや会計指導、少額融資のための基金づくりなどを支援し、急がず段階的に進めています。

——現在の販売方法の運営上の課題と今後の常設加工販売への期待について教えてください。

アベラトゥナさん：現在の週末マーケットの露店販売などでの最大の課題は、供給量の不足です。商品は朝8時に販売を開始しますが、10時にはほぼ完売してしまう状況です。特に生鮮野菜の生産量が足りず、常設施設として安定的に運営するには供給量がまだ十分ではありません。さらに、気候変動の影響も大きな困難となっています。雨季には過剰な雨が降り、乾季には水不足が深刻になります。そのため、「今できるもの」「今ある資源」を最大限に活用し、生産量をできるだけ増やすよう指導を行っています。

常設販売施設を運営していくうえで必要なことは、まず女性たち自身が施設を運営・管理する力を身につけることです。また、利用可能な資金や資源を正確に把握し、それらを活用しながら持続的に運営していくことも重要です。さらに、市民の需要を的確に把握することが求められます。そのための対応策として、農業専門家や農業ビジネスの専門家による支援を行っています。支援内容は商品を陳列する方法にとどまらず、店舗運営全般や経営・販売戦略にまで及びます。また、ビジネス経験を持つ女性専門家が、厳しくも実践的な指導を行う予定です。

2025年には、ミヒカタ協同組合の商品はスリランカ農業局の品質試験をとおりGAP(Good Agriculture Product)商品として販売が可能になりました。現在、キャンディ国立病院内のGAPショップに商品を置いて販売をしています。



現在準備中の常設加工販売所



常設加工販売所で販売予定の加工商品
(ジャム・ソース・チャツネ等)の数々

現地の有機農業専門家にインタビューしました

——有機農業のメリットについて教えてください。

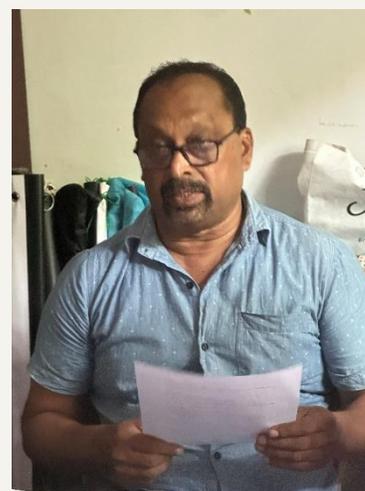
バンダラさん:有機農業はとても環境にやさしい農法です。土壌や水、そして周囲の生態系を守ることができます。化学肥料や農薬を使わないため、自然環境への負担が少ないのが大きな特徴です。この地域はもともと生物多様性が豊かな場所です。しかし、商業的農業では化学肥料や殺虫剤が多く使われ、その結果、生態系が損なわれてきました。本来守るべき自然が失われつつあるのです。私たちは、地域の環境を守りながら安全な野菜を供給することを目標に、有機農業を推進しています。

——マータレー地域の課題にはどのようなものがありますか。

バンダラさん:大きな課題は気候の問題です。天候が不安定で、農業に影響が出ることがあります。また、生物多様性が高い地域であるため、小さな昆虫や動物による被害もあります。そのため私たちは、苗床を分けるなどの工夫を行い、地域の環境に合った方法で栽培を行っています。この土地に適したやり方を選ぶことが重要です。

——参加している女性たちの変化についてどう感じていますか。

バンダラさん:プロジェクト開始当初、女性たちは有機農業の知識や技術をほとんど持っていませんでした。やり方も分からない状態でした。しかし、研修を重ねるうちに徐々に理解が深まり、今では有機栽培の方法をきちんと実践できるよ



有機農法／農業専門家のバンダラさん

うになっています。彼女たちは確実に成長しています。現在では、自分たちで考え、栽培し、販売する「起業家」としての意識も芽生えています。私たちの夢は、彼女たち一人ひとりが自立したビジネスウーマンとして活躍することです。

——今後取り組みたい作物はありますか。

バンダラさん:この地域の気候に適した作物として、辛味の強い青唐辛子(ナイミリス)、ターメリック、生姜、ライム、若いココナッツなどを考えています。特にナイミリスや生姜は市場価格が高く、需要もあります。地域に合い、収益性も期待できる作物を選びながら、多様な栽培に挑戦していきたいと考えています。ます。



屋根の上に設けられた家庭菜園



家庭菜園で収穫されたナツメグの実

編集後記

今回は、一般社団法人Think Locally Act Globally (TLAG) のスリランカでの活動を調査対象とし、現地へ赴いて直接調査・取材を行いました。活動地であるマータレーは、首都コロンボから車で片道約5時間の場所にあります。スリランカは昨年11月にサイクロンによる大きな被害を受けており、移動の途中にはその深刻さを物語る土砂崩れの跡がいくつも見られました。今回の調査・取材にあたっては、TLAGの石橋様、小島様をはじめ、現地事務所の皆様、そして現地協力者の方々から多大なるご協力を賜りました。この場をお借りして、心より御礼申し上げます。